12　済生学舎講師 石川清忠と女子医学生の教育

志村　俊郎[1,2]，唐澤　信安[2]，殿﨑　正明[2,3]，岩﨑　一[2]，寺本　明[4]
[1]日本医科大学教育推進室，[2]日本医科大学医史学教育研究会
[3]日本医科大学図書館，[4]日本医科大学脳神経外科

済生学舎は，日本で最初の男女共学の医学校であり，136名の女医を養成した．済生学舎の女子学生の教育は，明治17年12月高橋瑞子が，舎長長谷川泰に懇願し入学を許可されたことを嚆矢とする．済生学舎の女子医学教育とその周辺については，共著者の唐沢が，済生学舎創立者長谷川泰伝の中で，既に最初の報告がなされている．今回は，済生学舎女子学生の詳細と明治34年医学専門学校へ昇格するために突然の女子学生の拒絶，そしてその救済の為に同講師石川清忠が女子医学研修所を設立した女子医学生達の苦難な勉学への道のりを報告する．

石川清忠は，安政元年，杵築に生まれ，緒方洪庵の弟子の適塾生の藤野玄洋に医学の初歩を学んでいる．明治8年済生学舎第一期生として入学し，ドイツ語の原書で，内科・外科，病理学等を勉強し，明治10年に卒業した．3年後に長谷川泰に呼ばれ母校済生学舎の講師となる．石川は，ドイツ語に堪能で，ゴルト氏外科学（明治15年出版），須氏組織新論（明治24年出版）等のドイツ医学書を翻訳している．大正3年に亡くなる．

以下，石川清忠にまつわる済生学舎の女子医学生拒絶の経緯とその後を述べる．長谷川泰は，校規振粛の理由から当面の女子医学生の入学を明治33年に拒絶した．翌34年には，医学専門学校に昇格するために学則改正を行い，男子のみの入学とし，在学中の前期の女子学生30名，後期14名に対し，専門学校昇格のため全員の退学を命じた．勉学の道を失った女子学生達は，その苦境を石川清忠講師に訴えた．石川は，義に厚く，その嘆願を受けてその救済を考えた．石川清忠により設立された神田三崎町の東京歯科医学院の校舎をかりた女子医学研修所は，済生学舎廃校後の明治37年に私立東京医学校に合併され石川は同校長となる．その後明治43年私立日本医学校と合併するまで再び27名の女医が私立東京医学校より巣立っていった．

一方，多川，三崎らの明治女医の基礎資料によると済生学舎の女医は，73名にのぼり，その内最終履修者数は，62名であり，その意味で済生学舎は女医養成を大きく後押ししたともいえる．それらの内日本で2番目の女医の生澤クノ，7番目の女医深萱むね，そして22番目の女医で日本の女医育成の先駆者である吉岡弥生について述べる．生澤クノは，元治元年埼玉県入間郡に生まれ，東亜医学校と済生学舎に学び，日本で2番目の女医（登録年月日明治20年3月）となった．深萱むねは，明治2年岐阜県土肥郡に生まれる．明治20年17歳で上京し，済生学舎に入学し，明治23年卒業して医術開業後期試験に合格し，日本の7番目の女医（登録年月日明治24年7月）となる．22番目の女医（登録年月日明治26年5月）の吉岡弥生は，明治22年に済生学舎に入学し，明治25年に卒業している．その後，長谷川泰の女医の養成を促す言動より明治33年12月東京女医学校を創立する．東京女医学校では，当初，前期学科を教授したが，明治36年には前期及び後期生募集の新聞広告を出している．しかしながら明治45年に東京女子医学専門学校と認可されるまで，東京医学校と女子生徒の争奪もあり，学生数の急減を来たし吉岡弥生の経営する女医学校は一時経営困難に陥ったが，立ち直り現在の隆盛の基礎を築いた．

まとめ

済生学舎講師石川清忠の女子医学生の為に尽くした業績と済生学舎から東京女医学校創立への経緯を報告する．